

噫 巖谷小波先生

葛原 しげる

昭和八年九月四日午後四時の東京中央放送局の、ラヂオニュースが、先生の容態が絶望状態に陥つたことを全國に報告した。私は、岡山縣金光町の姉の家に一泊中で、浴室から出るこ、甥が、急いで来て、

「小波さんが、絶望だこいひますよ」

こ知らせた。そして、要件をも、そこくくに、歸京して、やつこ、六日午後、青山會館に於ける告別式に間に合つた。

多くのコドモ會、音樂會でのみ知る青山會館の大講堂、第三回の私の作品發表大會も、開いた事のある、華やかな思出懐しい大ホールが、今日は、いこしめやかに、哀しくも、黒い色に塞かれて、黒リボン付の夥しい花環が、祭壇さいはず、廊下さいはず實に數百基、所狭く供へられてゐる。

而も其等はみな、朝野の名士や、あらゆる諸團體からのものばかりで、凡ての社會層に縁故の深かつた故人の佛を物

語つてゐる。來弔者の數の多いこも各方面の名士の多かつた事も今更ではないが、稀に見るこころであつた。しかも、中には、兄妹らしい少年少女や、親子づれの人々もあつて、ほろりこさせられた。

「お伽のをぢさん」「童話の開拓者」「コドモ界のキング」、等々、みな美はしい別名を冠して、先生の訃を傳へる大新聞の段抜記事は、恐らく、全國の各家庭の、父も、母も、姉も、兄も、弟も、妹も、ひこしく、溜息を伴つて讀んだここであらう。

ほんこに、埋めるべくもあらぬ大きな空虛が、日本に、日本の文壇に、ここに、コドモの世界に、あいてしまつたのである。あゝ、

一、先生の學歴

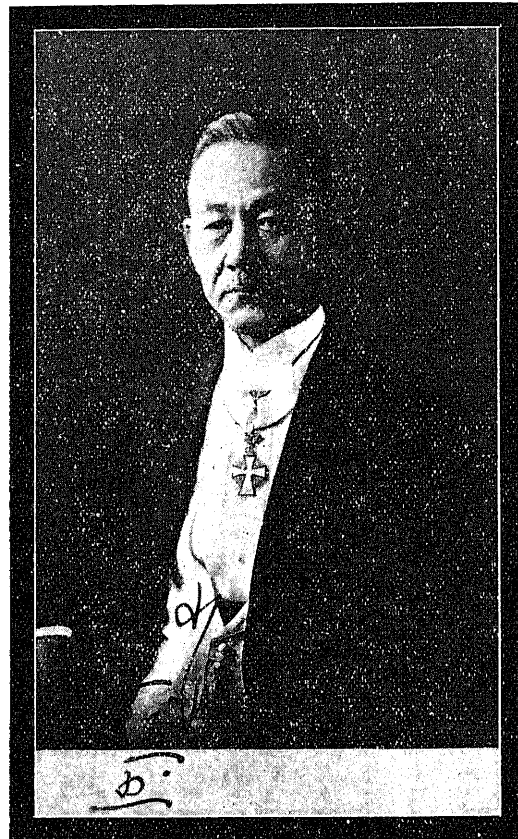
先生は、明治三年六月六日、「東京麴町區平河町の三軒屋

の父の邸で生れたのであらう。こ自分で、「おこぎ四十年」の中に謂はれてゐる。先生は、三男であるが、母君は、同年十月一日に他界されたので、先生は里子として、非常に親切な仕立屋に預け

られ、その家主なる長松男爵家からも、特に寵愛を受けられ、また、歸國後、二度目の母君も知らずに成長して、十五六歳の時、始めて、繼母に分つても少しも、その氣がせぬ上に、好いお祖母

様があつて、昔話を話して下さつたり、碁石のならば、歌の作り方なごを教へられた。別に、十歳前後、父君より漢詩の作り方も教はり、また、十一歳の頃には、下谷の鹽谷

青山先生、十六歳の頃には、牛込の川田發江先生の塾に寄寓して、半歳位づゝでも、他人の飯を食ひ、十八歳から二十一歳までは、小石川の杉浦重剛先生の稱好塾にをられた。



一方、八歳の頃、

松野林學士夫人ク

ララ女史にドイツ

語を習はれた事も

あるが、今の麴町

小學校(當時、平河

學校)、神田の訓蒙

學舎、外神田の醫

學豫備校を経て、

獨逸協會學校の卒業が、十九歳の時、

進んで其の専修科

に入つて二ケ年、法政經濟を學べたが、性に合はないので、後は、文學の獨習に志さし支那小説を森槐南先生に、ドイツ文學を北尾博士に學べたのである。

二、兒童文學に志すまで

先生自ら曰く一體、私の家は先祖傳來江州水口藩の藩醫である。それで、父の前半生も、その家業をこつて居たのだが、自分が官吏（大政官の内吏、後書記官）になつてしまつたので、子弟のうちの誰かには、それを繼がせなければなるまいと、その白羽の矢が私に立つたのだ。

そのために、まだ小學校へ通つて居る間から、ドイツ語を習はせられたり、その向の學校へ入れられたが、一方、祖母や其の侍女や、書生達から、はやく文學に親しむ様に仕込まれたので、少し醫者がいやになつて、好きな道へミだざりたくなつて來た。

所が長兄の立太郎が、これは工學博士で大學教授を勤め、三十五歳で死んだのだが、頗る嚴格な質だつたから、中々、私の志望を容れてくれない。何でも醫者になれ、それが厭なら法律をやれといふ。

それなのに、又この兄は、そのドイツ留學中、私に、クリスマスの贈り物として一冊の美本を届けてくれた。それは、オットウの世界童話集である。貰つた時は、まだ子供

だつたから、挿畫を見て娛しむ許りだつたが、やがて是が讀める様になるに、さあ面白くてたまらない。たゞさへ圖書館物や貸本で、かうした物になじんで居た私は、この本から益々興味を感じて、時々、その中の短い物を覺束なくも譯して見たりする。

それをまた、兄は、むしろ喜んで見てゐた。これは語學の練習としてでは有つたらうが、私はまた好い氣になつて、又しても學課を餘所に、かうした事にうき身をやつす。するにそれが兄の氣に觸つて、ある時は、折角書きあげた原稿を、目前で引き裂かれてしまつた事なごもあつた、そのため、私は幾度、暗涙に咽んだか知れない。

その内に杉浦先生の塾に入るに、先生は、あゝいふ方だつたから、よく私の心事を解してくれて、それ程熱心なものならば、寧ろ好きな事をやらせたがよいと兄を説いてくれたので、やつこの事で願が叶つて、始めて公然、文學を研究し得る事になつた（「お伽四十年」）。

そして、十八九歳の時、始めて、かの硯友社同人となり、

尾崎紅葉、石橋思案、川上眉山なごも相知て、後には、同

じ稱好塾生だつた江見水蔭を誘つて同人ミした程であり、
稱好塾では、大町桂月ミ共に、三羽鳥ミ呼はれてゐた。

かくて、十九歳の時、硯友社の機關誌「我樂多文庫」に處

女作「五月鯉」を、二十一歳の

時、新著百種に創作「妹脊貝」

を發表したが、兄から、何か

先人未着手のもので後世に残

り得るものを書けないかミ、

苦い顔をされて發憤して、遂

に少年文學に目をつけて、「黄

金丸」を書かれた。

三、少年文學處

女作「黄金丸」

先生二十二歳の春、博文館

は、東京に於ける唯一の大出

版書肆であつたが、その大橋新太郎氏ミは、別懇であつた

ので、その奨めもあつて、「黄金丸」を發行されたところ、

非常に好評であつたので、かねて、喧しい兄君も、ニコ

りされて、間もなく他界されたミか。

この「黄金丸」ミいふものは、少年文學ミいひ、お伽噺ミ

はいへ、大人の讀み物ミしても、よい程のものであつて、

先生自ら、

「八犬傳ミ狐の裁判ミを、

なひませにした位の陳腐

なものだが、これでも當

時は珍らしかつたので、

小さいながらも、礎石を

すえ得たのであつた」。

こいつてをられる。この

礎石ミは、先生自らの少年

文學建設の礎石ミもなつた

のだが、それを第一編ミし

て當時の文壇の歴々が次々

に筆をミつて、シリーズミして、第二編に合計三十篇(三十

冊)を逐次刊行しうる礎石ミもなつたのであり、更に、この

少年文學が、出版物ミしても成功したので、博文館は、更



に「日本昔噺」二十四編を、四年間に完成する礎石もな
り、更に進んで、「世界お伽噺」百篇及び「世界お伽文庫」五
十篇完成の礎石もなつたのである。又別に、雑誌「少年世
界」につゞいて「少女世界」「幼年畫報」及び「幼年世界」刊行
の礎石もなつたのだといへるのである。

そも、その「黄金丸」さいふのは、虎に殺された犬の遺兒
が、牛に養育されて力強くなり、他の犬の助太刀を得て、
狐や猿の邪魔があつても、遂に首尾よく仇討をする筋であ
るが、その文體が、全然、子供向でなく、用語の六かしさ
も、子供に分るものではない。その冒頭からして、

「むかし或る深山の奥に、一匹の虎住みけり。幾星霜いくさしづきをや
經たりけん、軀尋常の積よりも大きく、眼は百鍊の鏡を欺
き、鬚は一束の針に似て、一度吼ゆれば聲山谷を轟かして、
梢の鳥も落ちなんばかり。一山の豺狼麋鹿畏れ従はぬもの
もなかりしかば、虎はますく猛威を逞うして、自ら全眸
大王み名乗り、數多の獸類を眼下に見下して、一山萬獸の
君きみはなりけり」。

さいふ美文脈のものであり、先生自らもいはれたまほり、

八犬傳もさきの行文用語である。そして、その虎の氣入りの
狐の名が、聽水であり、犬には、月丸つきまる花瀬はなせさいひ、その
子に黄金丸が生れ、その養ひの親に、牡丹ぼたんさいふ牝牛があら
り、その雄おとこに文角ぶんかくさいふがあり、義侠の狩犬に鷲じゆ郎らうがあら
はれ、兎うさぎに、朱目の翁おきなさいふのがをり、黒花くろはなさいふ惡猿も
をるさいふ有様。以て、他の用語なごも想像出来るご思ふ。

此の如き「黄金丸」が、一般讀書界に與へたショックは大
なるものがあつたので、當時の有力なる新聞雑誌は筆を揃
へて之を歓迎し、世に紹介した。又中には、熱心に、文體
用語を非難したもあるけれど、それは末葉の事に屬し
てをり、世を擧げて賞讃したのである。實に「黄金丸」一篇
は、少年文學界への先生の華々しきスタートであつたので
ある。

四、お伽噺の大量を著作

先生は、前記の少年書類の他に、既記の四種の兒童雜誌
を主幹して、毎號に新作お伽噺を發表しつゞけた。その努
力は大きい。幼稚園程度のものから、小學低學年、及び高
學年の男女別々向に、よくも創作しつゞけられたものであ

る、従つて、それ等の單行本の數も、枚舉に遑のない程である。

そして又、先生のお伽噺は、ドイツのベルリン大學の東洋語學部では、先生の「日本昔噺」を教科書としてをり、それが縁ともなつて、先生は、三十一歳から、三十三歳の時まで、僅かに二ケ年に過ぎなかつたが、その日本語の講師としてベルリンに在任して、童話資料の蒐集にも勉められた。

お伽噺が、童話といふ様になつてからも、先生の努力は少しも變らず、文壇の人々が、童話と共に、童話の創作に進出した大正中葉の時代にも、平然として、兒童向の立場を失はずして、確かな歩みをつづけられた。こいふのは、從來のお伽噺は、筋本位であつて、藝術味が少ないといふ非難もあつた時代であつたけれども、かくて、先生の、翻譯された世界お伽噺の類も、創作されたお伽噺は、凡ての社會層の兒童に讀書趣味を表はしむる基ともなつた程、よく讀まれた。新進童話作者も多くなり、それ等の著書も多くなり、兒童讀物としての童話書類は、所謂汗牛充棟、

實に夥しいけれども、多くの圖書館に於ての統計によれば、先生一人の著書も、他の作者全部のものが比適するほど、よく讀まれてゐる。そして、幸にして、先生のお伽噺や童話は正しい人道主義に立脚したものと、みであるから、何等の不安なく、何んな時代の兒童にも與へたいものと、みである。

前記の「日本昔噺」「世界お伽噺」「世界お伽文庫」の外「小波お伽百話」「小波新お伽百話」等々中は、博文館發行であり、數年前の「小波お伽全集」十二卷の豪華大版の大出版は、その刊行集が出来て完成され、今年その續刊三卷も準備中の筈であつた。

五、お伽芝居

次に、先生は、童話劇や、學校劇にも、多大の開拓をされて、震災前、丸之内にあつた有樂座に於て、毎週土曜日曜の午後、お伽芝居をさせられた。これは、直接、先生が、久留島武彦先生と共に直接、監督指導されたものである。栗島狹衣、天野雄彦、石川木舟氏等は、技藝員として舞臺を踏み、今、映畫女優として名の高い多くの婦人た

ちの中には、このお伽芝居の子役として、先生の指導を受けたものが、少くないのである。當時は、まだ、學校劇ともいはず、童話劇ともいはなかつたが、「お伽芝居」、の名によつて、大體に於て、上流家庭の兒童や父兄達をも、何んなにか、よき午後を樂しましめたであらう。毎月、題目を改めての毎月興行は、かなり、骨が折れたらしい。兒童藝術の事が、大に理解され、大に進んだ今日、幼稚園にさへ、人形芝居が行はれてゐる今日、その様な機關のない事が、非常に淋しい東京である。それだけ、二十數年昔、よくも思はれることである。

六、お伽假名

先生の大慧眼は、假名遣の不自然に氣がついて、自らお伽假名と稱して、發音通りにかゝれた。これは、二十年間、外人に、日本語を教へて見ての經驗も手傳つて先生の信念を強くしたものである。折柄文部省内の國語調査會の一委員ともなつて、諸學者と共に、その改良に努力されたのであるが、今、行はれてゐる先生のお伽嘶の本の多くは、この發音假名によつてゐる。後日、先生の此の先見が我國の

國語史上にも讃へられるであらう。さういへば、私事に屬するが、私の祖父、盲人葛原勾當の自署日記が全部發音假名である事を、非常に喜んで下さつた先生であつた。

七、お伽講演

先生は、お伽嘶、童話の筆を斷たないと同時に、その口演を創めて、久留島先生と共に、國內は愚か、滿鮮、臺灣、樺太、布哇にまでも巡廻して、各地の兒童を悦ばせられた。そして、今や、全國的に、ラヂオだけでも分る様に、所謂、童話口演家は、他にも、岸邊福雄、安倍季雄兩先生をはじめ、非常に多いのであるが、そして、各々、特徴を異にする話し振ではあるが、先生のは、いつも、輕妙でしかも、變化に富んでゐて、少しも兒童を飽かしめず、身振も最も自然であつて、上品であつた。トーカーにでもなつておくべき國寶でもあつたのに！。

大正五年六月二十五日には、秩父宮殿下御幼少の頃、その御誕生日の御祝に、御前お伽講演をされた。此の如きことは、前古未曾有なので、後輩たる私共まで非常に悦んで、兒童文學界のものが總集合して、お祝ひもし、先生の感想

談をきいたりした。のち、澄宮殿下が、童謡をも御作りになつたのが發表され、作曲されて歌はれる様になつて、以後その御前講演をするの光榮を得たものも、次々に數名あるが、先生の時までは、前例もないこと、謂はゞ、かうした華々しい事は、先生によつて、はじめて、創められ得たのである。今、ラヂオによつての童話口演が、全國的に、かく盛んであるのも、先生の蒔かれた種が、蔓まなつて、はびこつてゐるのである。

八、俳句と俳畫

先生は、また、半面、俳句と俳畫をよくされた。そして、近年は、多く、その爲に全國を旅行された様である。それも先生の性格をよくあらはすところの作品ばかりであるのは、いふまでもないが、描かれるところの俳畫は、多く、童話界のもので、童心にみちたものが多いのは、さもあるべき點であらうか。その新作さるゝ句の、速成の鮮かさ、畫筆の運びの輕快さ。それであるて、風韻に富んだもの出来ることは、實に驚嘆に値する。

これについて、私自ら、先生に、遂にお詫びしそこねた

一事がある。大正中葉期に、私は「一姫二姫三太郎」といふ名での育児記録を出版したのが歡迎されて再版の準備にきりかゝり、初版は高島平三郎先生の紋文を頂いたので、再版には、さて、先生に俳句を頂いた。しかも、五枚も色紙にかいて頂いたのに直ぐ、關東の大震災となり、出版書肆の破産の爲に、そのまゝまなつてしまつた、しかし、先生は、その後、何度會つても、一言も、その事を責められなかつた。それだけ、申譯がないので、今や、その一姫も二姫も三太郎も、成人してゐるので、何かの記念に、何かかして再版して、先生の特に新作して下さつた俳句を、口繪にしたものを、先生に見て頂かうと念じてゐたのであつたのに――。その句は

年玉や一姫二姫三太郎
一姫の一番高き雛かな
二の姫の白酒を唯甜めたまふ
脊より高き菖蒲の大刀や三太郎
名乗り出て印地の猛者や三太郎

九、作歌者として、詩人として

先生が、行くさして可ならざるはなき才筆であつた事はいふまでもない。八面玲瓏は實に先生の事であつた。先生の作品の事であつた。そして、如何にも、澄んでゐた。去る九月二十二日夜の、「小波先生を語る會」の席上でも、私はしみじみいつた。

「先生の胸に、チョッキの時計の鎖に、いつも下つてゐて、チリン／＼いふよりは、リン／＼と、高い澄んだ音を立てつゞけてゐた金の鈴、あれは、先生で非常に御氣に入りのもので、和服の時も、つけてをられたが、あの澄んだ音こそは、先生の心ではなかつたらうか」。

澄んだ心、大自然に調和よろしく、何物をも映す事の出来る澄んだ鏡、清濁併せ呑む事の出来る大度量、そして、その爲には、唯なまやさしいのでなくて、一貫した至誠、根氣、進取の氣象のあられたればこそ、昔から先生の作にかゝる兒童唱歌の多くが、あくまで、健全であり、正義であるのは、いふまでもなく、また、意外に、非常に力強い先生性格の現れてゐるものもあつたのである。實は極めて圓滿であつた、極めて平和であつた。誰かもいつた、

「先生の御存命中は、そんなに感じなかつたが、先生亡き後の今、先生は、非常に温かであつた事に氣がつく。先生は、太陽の様であつたのだ、いつ會つても、明るく、そして温かであつたのだ、今や、私は暗くなり、冷たくなつた世間を感じる、これなら、御在世中、もつ／＼接近しておきたかつた。やはり先生は、大きな磁石にして、私共を、引いてゐて下さつたのだ、太陽さして、照らし暖めてゐて下さつたのだ」。

また、ある女流童話作家はいつた。

「先生から頂いたのではないのですが、私は、今、先生を記念して、片身の帶止をしてゐます。これは、先生が亡くなられたのをきいた時、私自分が、そんなら、もつ／＼早く、先生に御近づきを願つて、もつ／＼指導を頂きたかつたのに、今やおそし、そこで、私は、水晶を買つて帶止にしました。今後、毎日、帶をしめる時、童話に苦心する時、いつも此の水晶を見ては、先生を思うて、努力したいのです」。

さいつた。かくも、強い先生の存在であつたのだ。この先

生は、「愛」のシンボルの様でもあるが、そもそも愛は、只、床しく、やさしいのみではなくて、極めて、力強いものである。

私は、先生の作歌の中に、珍らしくも、今の世にも、これを反唱して、意氣を鼓舞したいものを、発見してゐる。

聖靈山

山あり 高さ 二〇三メートル

呼んで云ふ 聖靈山

乃木將軍の命する所

今を去る十年前

旅順の脊面攻撃に

日露惡戦苦闘の地

血を流すこと 滾々！

骨を曝すこと 壘々！

時 半歳に及ばんとして

遂に漸く 我に歸せり

其山 今 如何

只是 赤裸々の山

山上の記念塔

高く 天を指すの外

岩の奇なる無く

石の偉なる無し

時しも 秋の眞中

野菊 其所此所に

黄なるあり 紫も

中に見る 鬼薊

風に野菊ミ相搏つて

倒れたり その薊

香るなり この野菊！

これは大正二年十月二日の作である。この雄々しさは、

先生の心の一面でもあつたのである。先生が只一つに平和で圓滿で八面玲瓏のみの人でなく、強い根氣、努力、意志の人であつた他の幾多の事實を考へ合せて、「文は人なり」さきく時、肯かれるものが多い。

先生を、私が、名によつて知つたのは、私が郷里の小學校の時、東京にゐた兄から送られた「少年世界」によつてであるが、文通したのは、私の上京後のこと、そして、初めて直接お目にかゝつたのは、明治四十三年一月十三日夜、神田の學士會館であつた事が、珍らしくも確かに分つた。

これは、高島平三郎先生が、御長男文雄君の十五歳になられた時、昔なら元服する時だからして成堂の祝會を催されて、近親や別懇者を招かれた時、私も、末席に列なる光榮を與へられてゐて、中央に、小波先生を見、宴はてゝ後、高島先生から御紹介を願つた時であつた。この事が、かうした特殊のコドモに縁故のあるのが、私には尊い。

のち、私は、雑誌「小學生」が同文館で創刊されて、二年弱を主幹したが、故あつて退いて、博文館に入り、「少年世界」に手傳ふ様になつて、五六年間は、直接、先生の指導を受けた。そして、あの澄んだ金の鈴の音も、いつも、耳にし、また、先生愛用の金口の菫、MCCの香も、菫はのまぬ私も、知る様になつたが、博文館編輯部に大異動があつ

て、先生は客員格ならぬ、私は退社後、童話の事よりは、音楽や童謡の事に、多くの關係を有つ様になつてからの私は、先生と直接の交渉は有たなくなつたけれども、兒童藝術の事にかゝはる限り、先生の力を借らないですむ方面は、なかつたので、事さへあれば、先生に御頼りする事も多かつたし、いろいろの會合で、よく、お會ひしては、金の鈴の音を尊んだ。

今年、六月上旬、私の郷里から、先生は、郷里のエハガキでおたよりを下さつたのが、先生から私への最後の交渉となり、のち、廣島で御入院さきいて間もなく全快、御歸京の新聞記事に安心して、私は夏休暇に入り、八月下旬、旅行に出ようとする日、安倍季雄君からの電話の序に、先生の容態は、實は三ヶ月が危いこの事ださきゝ驚いたので、旅行先から、土地の名産を、いろいろ集めて、この中の何か一つが、先生の御口か御目に、少しでも御慰めか、安らかさを御傳へせよかしと祈つて、贈つたのであつたが……。

* * * *

先生は、しかし、最後まで、幸福であられた。「賣文二十年史」かの中に、不幸だき考へてをられるけれど、大臣や大将になつた友人もあるに、自分は、さ、自ら低うしてをられるけれど、一大詩人として、その時でも、日本一であられたし、更に二十年後の最後でも、益々、多くの功績を残された上、嗣子三一君は劇曲の作者として、又、舞臺監督者として、愈々確かな歩みをつづけてをられるし、只、三萬八千枚の原稿用紙による特殊の一大編著の完成を見られなかつたのは、残念であるが、既に其の前途は見える上、國文學專攻の令息が後繼して完成を急がれる事になつたさきも、先生は、全く幸福なる一生を送られたのであつたと思ふ。勿論、私共はよくいつた、「俳畫俳句もさる事ながら、先生には、童話の新作に専念して貰ひたい。」さ。しかし、旅行好きの先生には、それも無理な註文であつたらう。それだけ、をしなくてはならぬ。

* * * *

更に、幼児教育上特に思ふ、先生ほさの大きな存在は、何によりて、我が國が、有ちえたか。

はやく、母君に分れて不幸であつたが、之に代る人々の至情、骨肉の親身の愛、そして、環境の感化、就中友人の感應、そして、本人の好むところ。これらが一丸になつて、先生を成したのである。

幼児に對して關心を有つお互は、先生の一生を顧みて、特に此の點に心してゆく時、やがては「小波先生」に近いものでも、世に送り出す事が出来ようかと思ふのである。

(昭和八、九、二三夜湯河原、望の湯にて)

〔寫眞說明〕

肖像は大正十四年、アンデルセンの五十年祭を催された時、丁抹國政府からその主唱者として贈つて來た勳章佩用の先生でございます。